

「青ひげ」とカニバリズム

高 岸 敦 夫

はじめに

昔話において「人食い」は馴染み深いものである。狼男や人食い鬼など人ではないものが人を食べる話も多くあるが、「ビヤクシンの木」など、人が人を食べるカニバリズムが描かれることも珍しくはない¹⁾。本稿ではシャルル・ペローやグリム兄弟の昔話にも収められている「青ひげ」の物語とそのようなカニバリズムとの関係性について論じていきたい。ペローやグリムの「青ひげ」はヒロインの結婚相手がこれまでに何度も妻を殺害した殺人鬼で、危機一髪のところ で兄たちに救出されるという物語である。婚約者や夫が人殺しだったという設定や「秘密の部屋」などこの話に登場するモチーフは伝説や昔話の中ではおなじみなものであり、「青ひげ」の類話とされているものは数多くある²⁾。しかしこの物語は昔話としては異例なことだが、現実にあった出来事が基になったものだと考えられている。ジル・ド・レなど残虐な殺人を繰り返していた人物がモデルだとされており³⁾、さらにペローやグリムよりも後の時代でも「青ひげ」の物語とよく似た事件を起こした人物が現れると現代の青ひげとしてしばしば取りざたされることになった⁴⁾。このように「青ひげ」は残忍さが強調された物語ではあるが、ペローやグリムのテキストやその後の主要なアダプテーションにおいて直接的にカニバリズムが描かれているわけではない。しかしながら一方で「青ひげ」は近年の食人言説に最も関係の深い昔話であり、この物語の登場人物ほどカニバルと共通点を持ったキャラクターは昔話にはいないといっても過言ではないだろう。本稿ではこのような単に青ひげの残忍な性格がカニバルに似ているというのとどまらない、「青ひげ」の物語と食人言説との関係性を明らかに

していきたい。

1. 青ひげの妻殺しと食人言説

1-1. 青ひげとカニバル

ペローやグリムなどの昔話などにおいて「青ひげ」という名前は青いひげを生やしていた風貌からくるものだが、それゆえに人々から恐れられ、忌避されていた。こうした外見は猟奇的な彼の性格と合致し、彼の非人間性を強調し、怪物的存在であることを分かりやすく提示するものになっている。昔話によくある人外のものと結婚する異種結婚譚、とりわけ「アモールとプシュケ」や「美女と野獣」系統の話が収められている話型 ATU425 「いなくなった夫探し」とは共通点の多い物語である⁵⁾。とはいえこうした結婚話は最終的に2人が打ち解けあい幸せな結婚生活を送ることになる。それに対して青ひげはこれまでに結婚した妻たちを次々と殺害してきた人物であり、青ひげと最後に結婚したヒロインは青ひげの死によって生き延びることになる。

このような青ひげの所業とその非人間的な容貌は遠く離れた異郷に住むとされる人々の特徴とも一致する。古来より自分たちの領域外に住む人々に対してしばしば異形の姿や人食いなどの残忍な習慣が語られており、とりわけ犬頭人のイメージは中世において広く流通していて、彼らには人食いの習性があるともしばしば語られていた⁶⁾。しかしヨーロッパ人が新世界に進出することになった大航海時代以降、このような言説はヨーロッパ人の蛮行を正当化するためのものという意味合いを帯びていくこととなった。つまり新世界でのヨーロッパ人による先住民の虐殺や奴隷化、略奪を正当化するために引き合いに出されたのが先住民の非人間性だったのである。「カニバル」という言葉は今日では「人食い」の意味で一般的に用いられているが、もともとは新世界のとある人食いの習慣を持つとされた民族を指していたとされている。それが地図に人食いの光景を描いた挿絵とともに書き込まれ、地名のように扱われるようになった⁷⁾。後の時代にそれが一般化されて、民族や場所に限定されずに用い

られる語になったのだ。

「青ひげ」が昔話の中で特徴的なのは、単に風貌や残忍な性質がカニバルに似ているというだけにとどまらず、このような食人言説をとりわけ想起させるものになっているところである。ここではその点についてまずペロー版（1697）およびグリム版（1812）を取り上げることにしたい。ペロー版やグリム版の「青ひげ」の展開は、青ひげと結婚したヒロインが青ひげの留守中に開けることを禁じられていた秘密の部屋の鍵を開け、そこでこれまでの妻の死体を発見し、そのことに気づいた青ひげに殺されそうになるというものである。すんでのところヒロインの兄たちがやってきて助かるというものだが、ペロー版では初めの人物紹介でヒロインの家族としては母親と姉以外については言及されない。

この男（青ひげ）の近所には、1人の身分の高い貴婦人がいて、申し分なく美しい2人の娘がいました⁸⁾。

ヒロインの命の危機が迫った時、唐突に彼女は兄たちが助けに来るのを待ちわびるようになり、実際に彼らは妹が今にも殺されようとする瞬間になって登場し、青ひげを殺害するのである。青ひげの莫大な遺産はヒロインが相続することになるが、彼女は姉の結婚や兄たちが隊長になるための費用に使い、残った金は自身の再婚のために使われたのだという⁹⁾。殺されようとしているちょうどその時に助けに来る兄たちは機械仕掛けの神（デウス・エクス・マキナ）と見ることもできるが、その結末はあまりにもヒロインの一家にとって都合の良すぎる展開である。とりわけペロー版は、ヒロイン一家の私利私欲に使われたことがわざわざ語られるなど、正当な手続きによって相続したにせよ、初めから青ひげの財産強奪が仕組まれていたのではないかと思わせる文言が加えられている。グリム版「青ひげ」はペローからの影響が大きいためか初版のみに収録され、後の版では削除されたものだが、ペロー版と比較すると細部に興味深い違いがある。よりシンプルなものに整理され、ペロー版の釈然と

しない不可思議さは幾分か和らいでいるのだ¹⁰⁾。ヒロインは結婚前に父親と兄弟という男ばかりに囲まれた生活をしているのだが、彼女にとっては不本意な結婚ということもあって、兄たちに不測の事態には助けに来るように懇願するという伏線が用意されている。そして兄たちが妹の危機に駆け付けたのは、森にいた時に偶然に妹の叫び声を聞いたからとなっている。グリム版のヒロインも夫の遺産を相続することになるが、単にすべてヒロインのものになったとしか語られない。このようなヒロインが青ひげのみならず男家族に支配・搾取されていたという印象の強いグリム版に対して、ペロー版はヒロイン主導の青ひげの財産乗っ取りという側面が浮き立ったものとなっている。とはいえいずれにせよ彼の残忍な性格や人々を怯えさせる外見は略奪の正当化に都合のよいものだったと見ることができるであろう。

1-2. 青ひげの変容

新世界の先住民に安易に食人と結びつけることに対しては、こうした食人言説が流布して以降にヨーロッパ人の側からも批判が集まることになったのだが、それは知識人による西洋文明批判へと発展することになっていった。青ひげのイメージもこのような経緯に重なり合うところがあり、そのアダプテーションによって変容していくこととなった。ここではそのようなヨーロッパの知識人の批判的言説を簡単に述べたうえで、それをとりわけ髻髯とさせるアナトール・フランスの『青ひげの7人の妻』を例として取り上げたい。

新世界の先住民と食人習慣を結び付ける言動への批判でとりわけ有名な人物としてまずバルトロメ・デ・ラス・カサスが挙げられる。彼はフランススコ・ロペス・デ・ゴマラなど新世界の先住民の食人の風習を風潮した人物を徹底して批判し、スペイン人が強奪や殺戮などの数々の邪悪な行為の罪から逃れようとて、被害者である人たちを誹謗し中傷していると告発した¹¹⁾。その後フランスの知識人の間ではこうした発言に触発されて、カニバルを引き合いに出しながら、ヨーロッパ人の愚行を批

判するということが流行した。とりわけ有名なモンテーニュの『エッセー』第1巻第30章「カニバルについて」には次のようなことが述べられている。

死んだものを食べるよりも、生きた人間を食べる方がはるかに野蛮だ
と思う。まだ感覚が十分に残っている体に、拷問などによって苦痛を
追わせたり、少しずつあぶり焼きにしたり、犬や豚にかみつかせるこ
との方が死んだ人間を焼いて食べるよりも野蛮ではないか（古くから
の敵だけでなく、同じ町のものや隣人の間で、しかも最悪なことに宗
教心の下に行われてきた。我々は書物で読むだけでなく、こうした生々
しい記憶をこの目で見てきたではないか¹²⁾。

このようにモンテーニュはカニバルを引き合いに出して、宗教戦争で凄
惨な殺戮を繰り返したヨーロッパ人が、自分たちとは異質だからという
ことで彼らを野蛮と見なしている自文化中心主義の傲慢さを批判するの
である。

ペローやグリムの昔話に登場する青ひげはただただ残忍な人物として
語られていたが、その後のアダプテーションにおいてカニバルと同じよ
うな変容を見ることもできる。後述するモーリス・メーテルリンクの戯
曲『アリアーヌと青ひげ』やバルトーク・ベーラのオペラ『青ひげ公の
城』などのように、そもそも青ひげは殺人者ではなかったことが判明す
る作品も少なくないのだ。その中でもフランスの『青ひげの7人の妻』
は青ひげに投げかけられてきたこれまでの汚名を払拭させようとしたも
のである¹³⁾。つまりここではラス・カサスやモンテーニュらによる新世
界の先住民の擁護と同じようなことが「青ひげ」で試みられているのだ。
ラス・カサスやモンテーニュはゴマラら先人の名を挙げ、徹底的に批判
して、新世界の先住民に投げかけられた汚名を晴らそうとした。『青ひげ
の7人の妻』はそれと同じようなやり方で、史実を装ってペローの昔話
によって捻じ曲げられた物語の真実を伝えるという体裁をとっている。

実際はペローの昔話の改作であるのだが、年号を入れたり、固有名詞を多用したりしながらこちらの方が歪められる前の真実の物語であるかのようにふるまうのだ。ここで語られる青ひげことベルナル・ド・モラングという人物は善良で外見も申し分ない人物であった。彼は結婚した妻から裏切りを受けてばかりだった。彼の妻たちは次々と亡くなるが、それは不幸が重なったためであった。そして最後の結婚相手となるジャンヌ・ド・ラ・レスポワッスは、ペロー版のヒロインと同じ家族構成であるが、悪辣で淫蕩な女性であり、結婚後も堂々と愛人と一緒に生活を送る。そして妻と愛人は夫を謀殺し、哀れな夫は前妻殺しの下手人に仕立てられる。結局この陰謀には姉のアンヌや2人の兄も関わっており、家族ぐるみの犯罪だったのだ。こういった物語を語る途中でもペローが言及されることがある。青ひげの6週間の旅行について、事実はペローが書いたことと全く異なると指摘されるのだ。ペローは嫉妬に狂った夫がフェイントをかけたとしているが、実際は単なる相続の手続きだった、というようにあたかも調査して判明したことのように述べられている¹⁴⁾。妻殺しの汚名を着せられた青ひげは、実際には妻たちを殺していないばかりか、妻たちに貪り食われていたのだった。搾取するものとされるものは実は逆だったのではないかという疑念を抱かせる下地はペロー版にすでにあったが、後世の改作ではそれを掘り下げようとするものが出てきたのだ。フランスの『青ひげの7人の妻』はその極端な例であり、ミスティフィケーションともいえる手法ではあるのだが、そのことによりルネサンス期や啓蒙主義時代の知識人が思いを寄せたカニバルとの繋がりを明確なものにしているといえるだろう。

以上で述べてきたように、カニバルと青ひげはよく似た立ち位置にあると言えるのだが、共通しているとは言い難い側面もある。新世界の住人と結びついた食人のイメージは20世紀になると、ブラジルやカリブ海諸島を中心に、むしろ自分たちの文化アイデンティティの拠り所として、積極的に取り入れようとする動きが生まれた。とりわけ有名なのはブラジル・モダニズムの詩人オズヴァルド・ジ・アンドラーヂのマニフェス

ト「食人宣言」(1929)である¹⁵⁾。敵を自らのうちに取り込んで、その霊的な力を得ようとした人食いは様々な文化が混淆する状況において理想となるモデルだったのである。つまり西洋的な秩序から外れたカニバリズムは、押し付けられたものをただ受容するのではなく、栄養として食べつくし、十分に消化したうえ、自発的な文化を創造する行為と捉えられたのだ。しかしながらそのようなカニバリズム自体を肯定的に捉えなおすことは青ひげの妻殺しとは結び付け難いものである。伝えられている青ひげの所業は、自分よりも弱い立ち位置のものを自分の領域に引き込んで殺害するというものである。青ひげのイメージが実像からかけ離れているとか、青ひげの妻殺しはでっちあげだとかいった擁護はできても、妻殺しという行為そのものを肯定することは困難なことなのかもしれない。一般的にそれは弱者への暴力と捉えられるものであり、それに対して肯定的なことを述べるとミソジニストと見なされるリスクを負うからである。こうした抵抗・逆襲のシンボルとしてのカニバルはむしろ青ひげの最後の妻であるヒロインと結びつくものであるので、その点については後で述べていくことにしたい。

2. 青ひげの妻と今日的なヒロイン

2-1. ペロー「青ひげ」のヒロイン像

ペロー版やグリム版の「青ひげ」の物語後半はヒロイン側に都合よく展開し、莫大な財産を得るというハッピーエンドで締めくくられるのだが、ペロー版の本編の後に添えられている教訓はそのような物語の結末と合致しているとは言い難いものだ。ペローの教訓では青ひげの妻殺しやヒロインが命の危機にさらされたことに対して、女性たちが好奇心を抑えられないことが原因とし、夫に従順でなかった女性側の問題と捉えられている¹⁶⁾。こうした被害者側に事件の責任を押し付ける言動にはミソジニーが根底にあるようにも思われるが、実際にペローの女性観は厳しい批判にさらされることがある。例えばジャック・ザイプスはペローの昔話のヒロインを批判的に分析しているが、彼の昔話には女性の規範

となる資質が表されているが、それは淑やかさや従順といったものだという。例外として「赤ずきん」が挙げられているが、「赤ずきん」のヒロインは従順な女性でなかったために破滅に至ったのだ。「青ひげ」も「赤ずきん」によく似てはいるが、「青ひげ」のヒロインは悔い改めたために助かったとしている¹⁷⁾。とはいえ彼女が改心したというのには疑問の余地がある。彼女が「神に祈りたい」と青ひげに言ったのは助かりたいがために必死だっただけでも受け取れるし、先に述べたように被害者と加害者が逆ではないのかという疑念を持たせるところがある。ペローの昔話は口承文学をキリスト教化やヴェルサイユ化させたものとも指摘されるが¹⁸⁾、中途半端で不十分な、あるいは逆に蛇足感漂うそのローカライズが複雑味や異質性をもたらしているという側面もある。「青ひげ」のヒロインの描写と教訓の組み合わせはフランスの『青ひげの7人の妻』のような悪辣な妻たちにも発展していったが、後で述べるがその女性観への反発心からそれを読み替え・書き換えしようとする動きが生まれることにもなった。

2-2. 今日のヒロイン像と青ひげの妻の変容

昔話のヒロインも時代によって変化していくものだが、最近よく見られるようになったヒロインの特徴に「男に依存せずに、自立して生きていこうとする」というものがある。一例を挙げるとルースター・ティース制作のwebアニメ『RWBY』シリーズ(2013-) ¹⁹⁾ は、主要な4人の登場人物がそれぞれ「赤ずきん」、「白雪姫」、「美女と野獣」、「3匹の熊」のヒロインがモチーフとなっているが、彼女たちは世界を脅かす「グリム」と呼ばれるモンスターと戦う人物である。王子様などから保護されるのではなく、人々を守る立派なハンターになるために邁進するのだ。これに対して「青ひげ」は基本的に青ひげの存在が前面に出ていて、彼との結婚生活や彼の財力は欠かすことのできない要素となる。ヒロインは依存しないというより、むしろそれを当てにしたり、奪い取ろうとする傾向が目立っている。ここではそのような「青ひげ」のアダプテーシ

ヨンのうち、今日的なヒロインに近いキャラクターをいくつか取り上げていきたい。モーリス・メーテルリンクの戯曲『アリアヌと青ひげ』(1899)²⁰⁾のヒロインであるアリアヌは青ひげの妻たちが生きていると予想し、青ひげからリードを奪って、秘密を明らかにし、囚われの女性たちを救出しようとする。ペロー版やグリム版のヒロインが殺人事件に巻き込まれていく被害者であるのに対して、事件の真相を明らかにしようとする素人探偵のように行動する。アリアヌは青ひげの財宝にさほど興味は示さず、むしろ青ひげの妻たちを救出するという使命感を持つ人物であるため、今日的な男に依存しないヒロインに近い存在だといえよう。1918年初演のバルトーク・ペーラ作曲のオペラ『青ひげ公の城』(バラージュ・ペーラ原作)²¹⁾はメーテルリンクの戯曲に触発された作品だが、基本的に青ひげと彼の新妻であるユディットのやり取りのみで展開される。ユディットは青ひげに対して強い調子で自分の要求を述べ、それに青ひげが応えて城の秘密が明らかになっていくという話になっている。このように近年の青ひげは残酷性が薄められ、気弱な性格になっていく傾向があるのに対して、ヒロインの方は信念を持って行動したり、強い自我を相手にぶつけたりする傾向が表れてきている。しかしながらペロー版やグリム版がとってつけたようなものとはいえ一応ハッピーエンドになっているのに対して、『アリアヌの青ひげ』や『青ひげ公の城』ではヒロインの思惑とはかけ離れた結末を見せることとなる。アリアヌは思いが誰にも届かず結局ほかの妻たちを残して城を去ることになり、ユディットはほかの妻たちと共に秘密の部屋の中に納まることになるのだ。

よりカニバル的なヒロインの活躍を描いた作品ということではジャック・オフエンバック作曲、アンリ・メイヤック/リュドヴィック・アレヴィ台本のオペレッタ『青ひげ』(1866)²²⁾が挙げられるだろう。この作品では自由奔放な羊飼いの娘プロットが、財産目当てで青ひげに取り入ろうとするが、最終的に青ひげに殺されたと思われていた妻たちを救出し、悪辣な男たちをやり込める。プロットは何の後ろ盾もない女性だが、そのため煩わしい人間関係に囚われることがなく、自由に行動する。結局

は結婚で締めくくられる話ではあるが、彼女は青ひげを無毒化したうえで、彼を受け入れたのであった。男を食い物にしながら自己実現を果たす彼女の姿は相手を自らに取り込んで力を得るカニバルと結び付くものだとはいえるだろう。

2-3. 社会的抑圧とカニバリズム

ペローの「青ひげ」には前述の教訓に加えてさらに「もう1つの教訓」というものが添えられている。そこで述べられていることは「この物語は過ぎ去った時代の話である。このような恐ろしい夫はもういない」といったものである²³⁾。確かにこのペローの見解に呼応するように後のアダプテーションでは青ひげの弱体化の傾向を見ることができると。そして相対的にオッフェンバックのオペレッタ『青ひげ』のようなパワフルなヒロインや『アリアーヌと青ひげ』のようなはっきりとしたアサーティブネスを表明する力強いヒロインも登場している。しかしながら一方でペローの発言は見当外れも甚だしいものだともいえる。青ひげのような人物は今日でも探せばいくらでもいるし、何よりこの物語は今日において多くの人間が直面している現実を鋭く映し出したものと見なされているのだ。ヘルムート・バルツはペローの「もう1つの教訓」を取り上げた個所で今でも父親や夫などから迫害や暴力にさらされている妻や娘たちがいることを指摘している²⁴⁾。バルツが指摘するように「青ひげ」のヒロインはどこにでもいるような現実世界の追い詰められた女性たちを象徴するものと受け止められるようになったのである。

またフェミニズムの立場から見たカニバリズムは、抑圧に抗して自律的に生きようとする女性の行動に対して用いるものというより、むしろ女性が体制に取り込まれて男性に食い物にされ続けている様を表すものになっている²⁵⁾。フェミニスト作家として知られているアンジェラ・カーターの「青ひげ」を基にした『血染めの部屋』(1979)²⁶⁾のヒロインもカニバル的人物というより、むしろペロー版やグリム版のヒロインのように追い詰められていく女性である。20世紀を思わせる生活様式や固有

名詞が散りばめられている作品ではあるが、ペロー版に近い形で話が展開する。ただしここではヒロインを救出するのは男の家族ではなく、母親であり、母娘の絆が強調されている。またしばしば指摘されているように、ここでペローのように被害者側に罪を負わせようとするのではなく、あくまで加害者側の問題であることが示されている²⁷⁾。とはいえヒロインの立ち位置はペロー版とほとんど変わらず、救済者の性別が変わっても、親の良し悪しに人生が左右されてしまうという変わらない現状が反映されている。ペローの「教訓」などに表れる作者自身の価値観と思われるところは今日では到底受け入れられるものでないかもしれないが、ペロー版やグリム版のヒロインは、体制の中で搾取され食い物にされ続ける女性の象徴ということでは、今でも十分に今日的な人物だと言えるであろう。

おわりに

「青ひげ」は食人の光景が基本的に描かれることはないが、カニバリズムと密接に結びついた物語である。結婚を異質なものと一体化することと捉えれば、それとカニバリズムが結び付くことは必然なことなのかもしれない。主要な登場人物である青ひげとその妻には双方にカニバルの属性が備えられ、さらにそれぞれに二面性を帯びている。青ひげには異質な他者に対して投げかけられたレットルという側面と女性（妻）を食い尽くそうとする男性（夫）の代表者としての側面を、青ひげの妻には社会的抑圧に抗して文化的自律を得ようとする反逆者としての側面と他者の内部に潜り込んで内側から喰らい尽くしてしまう恐るべき捕食者としての側面を見ることができる。今日において「青ひげ」は、食人と同様に、誰にでも起こりうる現実をショッキングな形で映し出したものと捉えられるようになった。もちろん非日常的な猟奇殺人事件を味わうという楽しみ方は今でも残されてはいるのだが、なによりも異文化コミュニケーションの格好の題材として学べる物語なのだ。

(本学非常勤講師)

注

- 1) Cf. ウター、ハンス＝イエルク『国際話型カタログ：アンティ・アールネとステイス・トムソンに基づく分類と文献目録』加藤耕義訳、小澤晋はなし研究所、2016.
- 2) *Ibid.*, pp. 161-164.「青ひげ」はATU312に分類されているが、ATU311とも関連が深い。この型は妻ではなく、3姉妹が悪魔に次々に誘拐され、殺害されるというもののだが、中には姉妹が人肉食を強要されるというものもある。
- 3) Cf. 樋口淳『民話の森の歩きかた』春風社、2011.
- 4) 例えばヒストリーチャンネルのドキュメンタリー『トゥルーモンスターズ』（2015）では19世紀にシリアルキラーとして名を馳せたH・H・ホームズが青ひげに連なる人物として紹介されている。
- 5) ウター、ハンス＝イエルク、*op. cit.*, pp. 206-213.
- 6) Cf. マンデヴィル、ジョン『マンデヴィルの旅』大手前女子大学英文学研究会／福井秀加／和田章監訳、英宝社、1997.
- 7) Cf. Wolff, Hans [ed.], *America : Early Maps of the New World*, Prestel, 1992, p. 31.
- 8) Perrault, Charles, *Contes*, Garnier Frères, 1967, p. 123.
- 9) *Ibid.*, p.128.
- 10) グリム、ヤーコプ／グリム、ヴィルヘルム『初版 グリム童話集』3、吉原高志／吉原素子訳、白水社、2008.
- 11) ラス・カサス、バルトロメ・デ『インディアス史』五、第3巻第117章、2009, p. 343.
- 12) Montaigne, Michel de, « Des Cannibales », *Les Essais*, livre 1, chap. 30, Édition Gallimard, 2007, p. 216.
- 13) France, Anatole, *Les Sept Femme de la Barbe-Bleue*, dans *Œuvre*, Gallimard, 1994.
- 14) *Ibid.*, p. 327.
- 15) Andrade, de Oswald, *Cannibalist Manifesto*, <http://www.jstor.org/stable/20119601> (2022年11月1日現在)
- 16) Perrault, *op. cit.*, p. 47.
- 17) ザイプス、ジャック『おとぎ話の社会史：文明化の芸術から転覆の芸術へ』鈴木晶／木村隼子訳、水曜社、2001, pp. 45-50.
- 18) 樋口、*op. cit.*, p. 199.
- 19) Cf. ルースター・ティース公式ホームページ、<https://roosterteeth.com/> (2022年11月1日現在)
- 20) Maeterlinck, Maurice, *Ariane et Barbe-bleue*, dans *Théâtre*, tome1, Charpentier, 1929.
- 21) ベーラ、バラージュ『青ひげ公の城』徳永康元訳、向文社、1998.

- 22) Cf. 「2006 年度大須オペラ, メイヤック&アレヴィ作「青ひげ」台本翻訳(上): 名古屋における演劇社会学の試み資料編」『金城学園大学論集. 社会科学編』15(1), 2018. 「2006 年度大須オペラ, メイヤック&アレヴィ作「青ひげ」台本翻訳(下)」『金城学院大学論集. 人文科学編』15(2), 2019.
- 23) Perrault, *op. cit.*, p. 129.
- 24) バルツ、ヘルムート『青髭: 愛する女性を殺すとは?』林道義訳、新曜社、1992、p. 99.
- 25) Cf. Atwood, Margaret, *The Edible Woman*, Virago, 1984.
- 26) Carter, Angela, *The Bloody Chamber*, Penguin Books, 2015.
- 27) 宮澤邦子「血だらけの部屋」現代女性作家研究会編『アンジェラ・カーター: フォンタジーの森』勁草書房、1992, pp. 181-182.

